

命の精神であるオークが闇に向かって叫ぶ。その闇はアジアやアフリカの闇であるが、同時にイングランドの闇でもあった。オークの声におそれおのくアジアやアフリカの王たちの姿は、とりもなおさず当時のイングランド王や貴族や僧侶の姿でもあった。

「王は荒野から飢饉を呼びこまないだろうか
聖職者は沼地から疫病を呼びこまないだろうか
山や平地に住む人びとを
抑えつけ不安がらせ滅らすために
昼は飽食の繁栄と
夜は甘美な歌声のなかで

「州会議員は働く者たちの口に
貧困という止めぐつわをかませないだろうか
労働の値段を固定するために
寓意的な富をでっちあげるために

「顧問院の連中は
都市のなかに火を呼びこまないだろうか
繁栄と放逸の夜に
くすぶる廃墟の山を求めて

「人間に道をふみはずさせ
子どもを子宮から閉めだし
都市への供給を断ち切らせ
生き残った者たちに服従を学ばせるために」

William Blake と18—19世紀イギリス社会

羽矢 謙一

William Blake and English Society in a Transitional Age between the 18th. and the 19th. Centuries

Ken-ichi HAYA

ブレイクは1795年の『ロスの歌』でアフリカやアジアにまで、つまりケープやセイロンを先端として当時のブレイクの視野にあったであろう「世界」にまで、西から東へと革命の気運が広がってゆきつつあった情勢を歌っている。1795年6月11日と9月16日にはイギリスがケープのオランダ人のコロニーを占領するということがあり、1795年から96年にかけてセイロンもイギリスに占領されたのであった。

しかしこの詩のなかに語られているのは、じつはこの同じ時期のイングランドの情勢でもあった。革

フランス革命の進行とともにイギリスの国内事情の不安と混乱は極度にその深刻さを強めていった。1795年におこった一連のできごとはこのことを集約的に物語っている。対フランス戦争（1793年2月1日イギリスがフランスに宣戦布告）のために大陸からの穀物の輸入が困難となり、穀物の価格が暴騰した。そのためパンの値段も、この時代はみるみるうちにはねあがり、世紀の変わりめには90年代初めの2倍になった。加えて1795年にはイングランドは凶作で、同年7月には食糧暴動がおこり、それはさらにロンドンでの反戦運動にまで広がっていった。ロンドンの顧問院は5月から12月まで食糧危機の対応に忙殺された。またこの年「二条令」が公布され、国家反逆罪を言論と大衆集会の取り締まりにまで広げた。すでに1792年5月に扇動的集会文書取り締まり令が発布されて、『人間の権利』の著者トマス・ペ

インがその年9月におこなった友愛会での演説をとがめられて逮捕状が出されたという事件があった。このときペインは間一髪でフランスに逃がれたが、この逃亡にブレイクは手を貸したことが伝えられている。

この時代、国王とアングリカンの教会とホイッグ党の政府が進歩派の知識人やジャコバイトとよばれた急進派の民衆を抑えつけ、他方では「顧問院」が暴民をそそのかして放火させ、それを大目に見るとか、そういう暴民をわざわざやとって事をおこせるというようなことをしたのであった。フランス革命の支持者で、科学者（酸素の発見者）でもあり聖職者でもあったジョウゼフ・ブリーストリーのパーミングムの私邸が暴徒に襲われ、焼き打ちにあうというできごとが1791年7月にあった。少し時代は遡るが1780年にはカトリック教徒救済法に抗議してロード・ジョージ・ゴードンが率いる暴動がロンドンでおこり、カトリックのチャペルを次々に襲撃し、イングランド銀行やニューゲイト監獄までも襲うというできごとがおこった。20歳を過ぎたブレイクはこのとき焼打ちの情景を見ているのである。

飢饉と疫病と火災、そして戦争と貧困というこれらのイメージはブレイクの作品のおきまりの道具立てだが、それらはいかにもイギリスの産業主義とそれに支えられた帝国主義の裏がわにあったイギリスの暗部を示している。

いまひとつブレイクにとって大きな攻撃的であったのはキリスト教の形骸化ということであった。『ヨーロッパ』という詩ではオークがイエス・キリストと同じ年に、つまりいまより1800年前に生まれたということになっていて、そこにはオークがキリストに代わるべき者という含みがある。キリストは悲しみの諦念のなかに沈みこみ、キリスト教は専制主義の政治権力とむすんで人民に服従を強いる圧制的なものに墮してしまった。神に祝福された人類の祖先たちもいまはむなしく白く晒された骨となっている。

つまりアダムは朽ち果てる骸骨となって
エデンの園に白く晒されて横たわっていた
ノアもまたアララトの山なみの上に
雪のように白く

だがいまや、オークがヨーロッパの暗黒の中で赤く燃えて荒れ狂う。革命の炎がそのむかしモーセの

一行を導いた火の柱のように新たな火の柱となって
空に燃えて現われる。このときエゼキエル書第37章
にあるような骨の谷から骨たちが甦える。

塵と化した死者たちから出てがたがたと音立てながら骨と骨が
合わさり ゆれながら身悶えしてうちふるえる土
が息を始める
こうしてすべての人間が裸で立ち現われる 父たちも友たちも
母たちも幼児たちも 王たちも戦士たちも

フランス革命の雲行きはみるみるうちに怪しくなり、1797年には有名なナポレオンのアルプス越えに象徴されるように、フランス革命の初期の精神はまったく失われてしまうのであるが、まだこの詩の時点ではブレイクは革命を信じているようにみえる。革命のなかから人びとがほんとうのいのちを得て甦えり、しかもみんな裸となって甦えるという、宗教的なビジョンがここにある。革命が恐怖政治への墮落という方向をとることがなかったなら、ナポレオンの出現がなかったなら、フランス革命はたしかに地上の人びとに大きな希望をあたえるものとなったはずだ。現に、フランス革命よりわずか10年ほど前に、アメリカ革命がともかくもそういう希望を実現したばかりだった。

むっつりした顔をしてちじこまっている大地、それこそ墓場と化したこの世の大地の、その子宮がオークを迎えてふたたび動きだす。終末的なビジョンと、母なる大地というビジョンとが重なりあう。それはどんなにちじこまっていたても、つねにあくことなく甦えりの喜びを求め、新しい生命を生みだそうとするこの人間の世界のたくましさ、復旧力を信じる詩人が生みだしたビジョンだった。オークの炎を迎え入れる「墓場」の大地が、いまやまるであくことのない欲情に燃える女のように喜びの叫び声をあげるのだ。

墓場が喜んできゃーっと叫び うつろな子宮をふるわせ 固い陰茎をしっかりと握む
彼女の胸は荒あらしい欲情でふくらみ
乳と血と精液の美酒が
山に谷に平野に
奔流となって流れだし 叫び声をあげて踊る

終末論的なロマン主義だけではいつも幻滅に終わる。この世の革命はいつも流産に終わる。それに現実の革命はいつも「流血の戦い」(『ヨーロッパ』)を避けることができないのであり、きれいごとで顔をぬぐっていることはできない。

ブレイクがさいごに期待したものは現実の革命ではなくて、革命の精神であったと思う。いっさいの古いものを打ちこわし、新しいものを見いだそうとする精神、「すべての人間が裸で立ち現われる」という言葉にあるように、だれもが自由で平等であり、真実の姿でむすばれるような社会の実現を求める精神であったと思う。それは時代をこえてあまりにも理想主義的なビジョンではあるが、革命の精神とはそういうものではないか。

ブレイクがキリストに代わる存在としてのオークを作りだし、出現させたことにはこのような意味あいがあったのである。オーク (Orc) はローマ神話のオルクス (Orcus) にならった名前だろうか。オークはもと地獄の王セイタンにつながるものであって蛇の形をしている。つまりオークはこの世の既成の価値体系を一挙に破壊し、いっさいの価値観を逆転させる霊である。

オークの父はロスである。ロス (Los) は太陽 (Sol) のアナグラムであり、ギリシャ神話のアポロのように想像力の霊、詩的魂の霊である。ロスの妻で、したがってオークの母はエニサーモンと呼ばれ、その表象は月であり、彼女のなかには、この世の移り変わりをいつも静かに、変わらぬまなざしで眺めている大いなる慈愛の母といったイメージがある。ロスにはブレイク自身で、エニサーモンはブレイクの妻キャサリンの投影ではなかったのか。

ブレイクはフランス革命の勃発からまもない時点で、それこそ革命の進行とそんなにへだたりのないところで『フランス革命』を書いたが、全7巻の計画で第1巻だけしか書かれず、それも活字にはおこされながら出版されなかった。フランス革命の精神がイングランドにはね返るのを恐れた当局による進歩派の人びとへの引き締めが急速に強化されたり、1791年7月にはもうイギリスのなかでバスターニーの崩壊を祝うようなことがあれば暴動がおこらうという新聞報道が伝えられたくらい反動的な気分が高まってきていた状況のなかで、出版元が本の刊行を恐れたのだろう。

しかしブレイクは『フランス革命』(第1巻の本の扉に1791年の日付けが刷りこんであった) 中絶の

ち、『アルビヨンの娘たちの幻想』(1793)『アメリカ』(1793)『ヨーロッパ』(1794)『ロスの歌』(1795)とあいついで出版した。これらのなかでブレイクはアメリカ革命について書き、フランス革命について書き、フランス革命時代のイギリスについて書いたのだった。これはブレイクが弾圧を恐れて試みたカモフラージュを意味しない。フランス革命はイギリスの産業革命と並んでブレイクに大きな影響をあたえたできごとだった。彼は革命のほんとうの意味を、これら幻想的な詩に託して考えていきかかったのだ。